



大樹のこころ

感動の卒業式

3月20日(月)。快晴の下、第76回卒業証書授与式が挙行されました。卒業式は、学校で最も大切な式です。自分は昨年4月に大樹寺小に赴任しました。本校では、新型コロナウイルス感染拡大防止のために、卒業式を簡素化した形で行ってきただけだと聞いていました。しかし個人的に卒業式は、子供たちの心に残るものにしていきたいとの思いがありました。そこで今年は「数々の試み」にチャレンジすることにしました。

まず卒業証書を全員に授与することにしました。昨年度は代表児童に授与し、他の卒業生は担任点呼による返事をするのみでした。一人ひとりの顔を見て証書を授与する。これは自分のこだわりでありました。証書渡しの時に、卒業生は演台の前に立ちます。その時に真っ直ぐに自分の目を見てくれます。この視線が「卒業に値する証」であると感じました。授与する際に、自分は小声で「おめでとう」と声をかけていきます。すると時々「ありがとうございます」と返してくれる子がいます。この瞬間、小さな感動が胸を駆け巡っていきました。

次の試みは校長式辞です。「ありきたりな式辞はやめたい。今年の卒業生にしか語れない言葉を」と考えました。そこで1年間の6年生の生活を、スライド写真を活用しながら振り返る内容にしました。さらにピアノの生演奏を加えた演出をしました。自分で考えた演出だったのですが、ピアノ演奏に情感が強く揺さぶられてしまい、何度も涙腺が緩んでしまいました。

最後の試みは、「職員によるはなむけの歌」です。卒業式を感動に彩るのは歌です。しかし在校生が参加していません。そこで教員が歌とメッセージを送ることにしました。卒業生には内緒のサプライズ演出です。歌う曲は卒業の定番ソング「さくら」。先生方が合唱台に並び歌を歌い始めると、卒業生の中からすすり泣きが聞こえてきます。その姿を見て、教員も涙です。歌の間奏に担任の先生が卒業生に向けてメッセージを述べ始めると、式場内の涙腺が崩壊します。心地の良い一体感。温かな心が体育館を包み込んでいきました。

式を締めくくるのは、卒業生による呼びかけと歌です。自分のすべてを出し切って歌う姿に、卒業生の確かな成長を感じました。教師として最高の喜びを感じる時です。式が終わり、退場する卒業生。その後ろ姿が一回り大きく見えました。第76回卒業生はこうして大樹寺小を巣立っていきました。

本当に素晴らしい卒業証書授与式。子供たちにも教職員にとっても、忘れられないものとなりました。教育現場には、この日の卒業式のような感動が大切なのだと思い起こさせてくれた1日でした。

